
秋と十円玉

ドアのふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋と十円玉

【Nコード】

N4592I

【作者名】

ドアのぶ

【あらすじ】

秋。

十円玉と想い出。

秋。

木々が鮮やかに色付き、山を彩る季節。

秋。

様々な作物が実り、恵みを与えてくれる季節。

秋。

日が短くなり、何処か物悲しさを感じる季節。

秋。

この季節が訪れるたび、心に甦る思い出がある。

ああ、今年も秋がやってきた。

小学五年生の頃だった。

突き抜けるほどよく晴れた日で、見上げた空は何処までも青い。

この時期にしてはとても暖かく、長袖一枚で十分に過ごせるほどの陽気であった。

気付けば家から飛び出していた。

何か目的があったわけではなく、何処か生きたい場所があったわけでもない。

ただ気が向くままに、この空の下を歩いていたかった。

川沿いの道に行く。

まだ昼前でありながら、日差しは燦燦と降り注ぐ。並木の桜達は、

葉が落ちて寂しそうに佇み日陰をつくる。土手には真つ赤な彼岸花が咲いており、陽気につられたのかちらほらと蒲公英の姿まで見える。静かな流れの水面は、きらきらと光を反射して美しい。青空では、いわし雲が仲良く連なって泳いでいる。

近くの公園からだろうか、同年代と思しき子ども達の歓声が響いてくる。どこか遠くからは、「石焼芋」と誘う声が聞こえて来るが、こんなに暖かな日ではなかなか売れないだろう。

一人、歩いているだけだが、それがたまらなく楽しい。

目に映るもの、耳に届く音、これら全てから刺激を受け、飽きることは無かった。

気分は高揚とし、足取りも軽い。

この頃お気に入りの特撮番組の主題歌を口ずさむ。激しく力強いこの歌は、今の昂ぶった心にはよく合っていた。

きらりと、道の先に何か輝くものが目に入る。

近付き拾い上げてみると、それは落ちているにしては妙に綺麗な十円玉だった。製造年を見てみると、なんと自分の生まれた年と同じであった。製造されてから十年以上経っているのに色褪せていない事を疑問に思ったが、それよりも、偶然に見つけたものが自分と同じ年であることが何故だかとても嬉しかった。

お金を拾ったら交番に届けなさいと、学校で教わっていたが、十円玉なんて届けても迷惑にしかないだろう。

そう自己弁護をし、親近感が沸き、元より手放すつもりなど欠片も無いこれを持ち帰ることにした。

中断していた歌を再開しながら、また歩き出す。

金臭くなることを気にしないまま、手の中にしっかりと握りこんで。

公民館の前に辿り着く。

何かの教室でも開かれているのか、多くの人が集まっていた。あまり知られていないが、ここでは、生け花やお茶、俳句や絵画、さらには空手などの教室が開かれている。月曜・土曜に開かれる空手教室に通っている為、内部情報には少し詳しい。

曜日と人々の服装から、たぶんお茶の教室だろうとあたりをつける。どうやらそれは正しい様で、聞こえてくる言葉の端々からそう判断できた。

さらに様子を観察してみると、これから稽古が始まるから集まっているのではなく、帰り際の談笑をしている様だ。

そこで、いったい今何時なのが気になった。ここに来るまでは全く気にしてはいなかった。

公民館には、大きな時計台がある。不可思議な格好をしたもので、皆でいつたい何の形なのかと考えあつたりしたものである。結論は未だに出てはいない。

時刻を確認すると、程なくして正午を向かえようとしていた。

昼食までには家に帰らなければならぬ。

まだまだこの青空の下で歩いていたかったが、しかたがない。名残惜しさを感じつつも、家に向かうことにした。

家に帰り着くと、居間で姉が寛いでいた。

部活動で疲れたのか少々くたびれた顔をしていたが、こちらに気付くと笑顔で迎えてくれた。

何処に行っていたのか、部活動はどうだったかなどと話していると、戦利品の自慢がしなくなった。

「道端で拾ったんだけど、綺麗でしょ。しかもこれ、僕が生まれたのと同じ年に作られたんだよ」

こつこつ言って、十円玉を見せる。

「本当に綺麗だね。それに同じ年生まれのなんて、何か良いことが有るかもね。お守りにでも入れて大事にしておいたら」

姉は、感心したように楽しそうに相槌を打ってくれた。

自分自身が褒められたようで嬉しくて、ますます大切なものとなる。

手の中の十円玉をじっと見詰める。きつと、顔は酷く緩んでいるだろう。

微笑ましそうにこちらを向く姉の視線が、少しだけ恥ずかしかった。

ふと、最近耳にしたある言葉を思い出す。

顔を上げて姉を見る。

「十円ハゲって、なに？」

「キミがなったヤツでしょ」

何を言われたのかが解らなかった。

「円形脱毛症。ストレスとかでなるヤツで、十円玉の大きさくらいに禿げるんだよ」

言葉を失っているのに気付かずに、姉は続ける。

「キミが保育園に入る前くらいかな。病院によく行ってたでしょ。あれ治療の為だったんだよ」

朗らかに笑う姉を他所に、記憶を辿る。

確かに、保育園に入る半年位前に病院によく行ってた。だがあ

れは、母が医者に掛かっており、幼い自分を家に残すことは出来ず連れ行っていたのだと聞いていた。

嘘、だったのか。

よくよく思い出すと、不自然な点が出てくる。

何故、診察室に自分が居るのか。何故、医者の前に座っているのが自分なのか。何故、母は申し訳ないような辛そうな顔をしているのか。

疑問に囚われるこちらの様子に気付いたのか、姉が気まずそうに言う。

「ご、ごめん。そこまでショックを受けるなんて思わなくて……。でも、今はたくさん髪の毛あるんだし、気にしない気にしない」

姉の慰めの言葉も聞こえず、真実にただ呆然とする。

手に握った十円玉が、色褪せて見えた。

昼食の準備が出来たと、母が呼びに来るまで、ただ立ち尽くしていた。

その後、あの十円玉が何処に行ったのかを覚えてはいない。

しかし、あの十円玉が発端で起こった出来事は今でも鮮明に覚えている。

秋。

この季節が巡ってくると何時も思い出す。

燦燦と降り注ぐ日差し。

突き抜けるほどに青い空。

桜に彼岸花に蒲公英。

きらきらと光る水面。

天を泳ぐいわし雲。

子ども達の歓声に焼芋屋の声。

公民館の時計台。

そして、十円玉。

秋。

それは、悲しい真実を知ってしまった季節。

(後書き)

禿げるの怖い…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4592i/>

秋と十円玉

2010年12月31日08時16分発行